

第百五回研究発表

武蔵七党の一つ

野與党諸氏拠点の考察

菅 白 蓮
蒲 岡 田
編

越谷市郷土研究会

理事 山崎善司

野與党シリーズ 2、

武蔵七党の一つ

野與党諸氏拠点の考察

蓮田
白岡
菅蒲
編

越谷市郷土研究会
理事 山崎善司

田敷・岡白・菅蒲
國語学雑誌の野與党編



葛蒲・白岡・蓮田
野與党諸氏の拠点分布図

野與党諸氏拠点の考察

菅蒲・白岡・蓮田市

武蔵国騎西郡と云はれた、南埼玉郡の北部地域、即ち、葛蒲町・白岡町・蓮田市に、平安末期より中世にかけて播擧した武士団は、野與党と云われ、武蔵七党の一つに数えられていた。

「野與党」と云はれた一族の内、葛蒲町には、萱間・大蔵・西脇氏、白岡町には、野與・鬼窪・南鬼窪・佐那賀谷氏、蓮田市には白岡・黒浜・江ヶ崎氏等が、拠点を持ち館を構えていた。

註、大蔵氏に付いては、比企郡大蔵を比定する向きもあるが、野與党の支配地が、騎西郡であるので、他郡より起るの是不自然で、葛蒲町三箇地区の大蔵を、入居地と推定する。

坂東八平氏

坂東八平氏は、南関東に於て、大きな勢力を握った有力武士団で、之に属す、坂東八平氏とは、秩父・土肥・上総・千葉・三浦・大庭・梶原・長尾である。

坂東八平氏が、坂東諸国に勢力を張ったのは、桓武天皇の曾孫高望王が、寛平二年（八九〇）に平姓を賜り、臣籍に降下し、軍事貴族として上総介に任じ、上総の俘囚の反乱を鎮圧してからである。

坂東八平氏の中で、武蔵国に大きな勢力を持つのは、中村太郎将恒を祖とする秩父氏、宗家の嫡子忠常を祖とする千葉氏、その枝族に野與党がある。

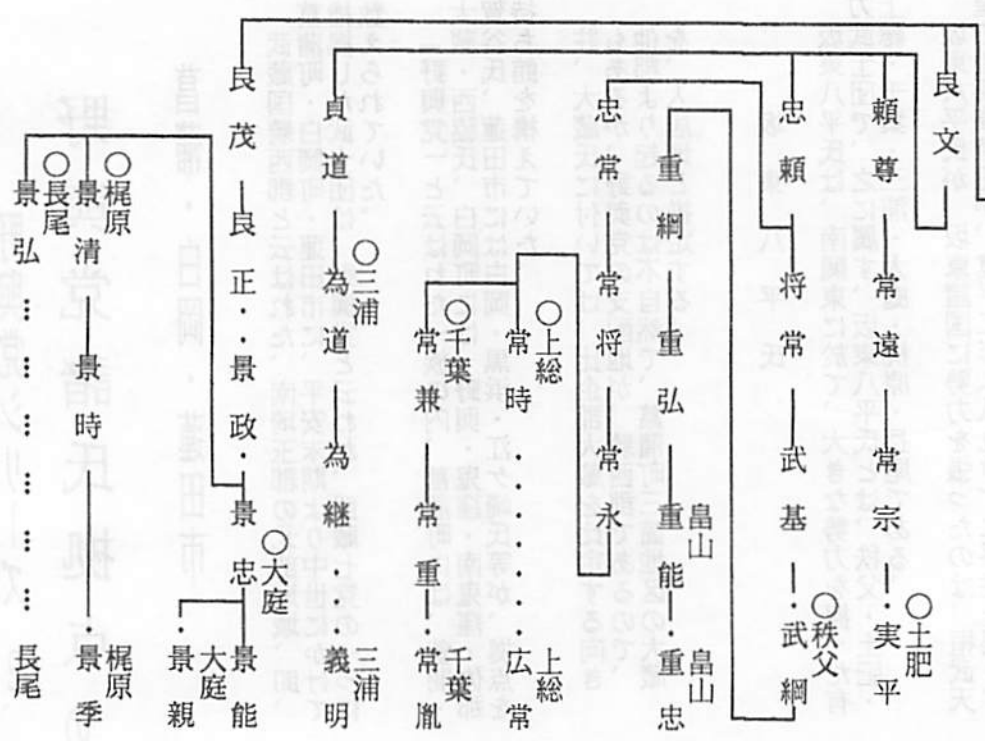
蓮田 白岡 編
菅蒲



武蔵武士一族播擧分布図

坂東八平氏 (略系)

平高望王



坂東八平氏は、大宝令に拠れば、皇孫以下五代の孫に至までは、皆皇親の列に在りて王と称するを得るなり。然に、桓武天皇始めて御母卑賤なりし二皇子を臣下に列し之に姓を賜はりしより、天皇の御子衆多なる時は然せらる事歴朝殆ど絶えざるに至りぬ。

皇族にして姓を賜はりし重なるものは、平氏と源氏となり。

平氏桓武天皇より出ず、天皇の皇子葛原親王勤儉にして物に做らす、上表して子女の王号を停め臣下に列し、平朝臣の姓を賜はらむ事を請ふ、淳和天皇許し給はざりしが、其の懇請再三なるに及び、親王の子高棟・善棟等に平氏を賜はり、上総介に任せらる。

此れ桓武平氏か坂東に繁衍する源なり、高望に国香・良兼・良持・良文・良茂等の諸子あり、良文・良茂の子孫は特に門葉繁茂し、坂東の豪族となり、互に威武を競いたり。

所謂坂東八平氏は之の兩人の子孫の家家なり、蕪村の俳句に曰く、「雉子鳴くや 草の武蔵の八平氏」と、其の昔、彼等が榛莽を開き荒野を治め、己の領地を増殖して互に強盛を競ひし様躍如たり。

上記の如く、八平氏の系図を掲げむ。

坂東八平氏とは、上記の系図に記せる土肥・畠山・上総・千葉・三浦・大庭・梶原・長尾の八氏を云う。八平氏の系図は異説甚だ多く、其の他諸書により皆多少の異同あり。

今主として尊卑分脈平氏系図に拠りて記載したり。

武蔵七党

坂東八平氏とは別に、武蔵国の有力な武士団として、威を震ふのが、武蔵七党である。

武蔵七党とは、横山・猪俣・野與・村山・児玉・丹・西の諸氏を云う。

これ等は、国司等の子孫が土着し勢力を蓄え、地方豪族と族的結合を果たし、武士団を形成したものである。

これ等の諸族は、同族結合の確認の為に、共通の祖神を祀って、党結合の中心としている。

因に、野與党一族の祖神は、久伊豆神社を祭神として祭祀している。

野與党

野與党諸氏の播擧した地域は、武蔵国騎西郡と云はれた地で、埼玉県の東部地域で、北は騎西町より、南は八潮市迄の南北に狭な地域である。

天慶の乱の後、平良文の子忠頼が武蔵押領使となり、以来、代々武蔵国を支配し、その子孫が分派して、領内各地に播擧し、中世武蔵武士団の中核を成す地位を占めるに至り、野與党の名が出て来る。

野與党に付いては、「武蔵七党系図中の野與党系図」と「千葉大系図」に出て来るが、多少の食い違いがあるので、どちらが正しいかとの論争もあるが、両方共正しいと判断する。

「千葉大系図」には、野與氏の宗家千葉氏を中心に、

其の支流への分派を克明に記したもので、野與党の分派の過程を知る事が出来る。

野與氏は、平良文の子忠頼より出ず、其の枝族には、野與・道智・多賀谷・道後・笠原・栢間・大蔵・西脇・鬼窪・南鬼窪・白岡・佐那賀谷・黒浜・江ヶ崎・箕勾・波江・金重・神倉・栢崎・須久毛・古志賀谷・大相模・八条氏等に分派している。

「野與党系図」には、野與一族の枝葉を克明に記してあるが、「千葉大系図」との関係が、今一つ解り悪いので論争の元と成っている。

「野與党系図」を、前期と後期の野與党に区分けする事で、宗家千葉氏との関係と、一族の党的な束ねとしての「総領家」の存在を知る事が出来、依り明確に理解する事が出来る。



野與党分布田
白岡・蓮野
蒲城の野與

千葉大系圖 (略)

桓武天皇

三代略

国香

貞

盛

...

...

...

...

...

平清盛

...

平家総領家

村岡五郎
良文
坂東八平氏祖

陸上下総常介
忠頼

武藏押領使
上総介
忠常

初代 千葉氏
上総権介
常將

二代
下総権介
常長

三代
上総介
常兼

千葉宗家

鎮守府將軍
村岡小五郎
忠通

中村太郎
恒親
秩父畠山祖

恒親
村上党祖

常長
武藏押領使

野與六郎
基永

領相模鎌倉
三浦和田祖

山辺次郎
頼尊
土肥土屋祖

武藏四郎
胤宗
野與党祖

元宗

野與六郎
基永

周防八郎
常繼

野與庄司
近永

行十郎
号童大夫
長

大蔵二郎
常宗

箕勾太郎
常能

箕勾小太郎
能基

箕勾弥太郎
為経

同左兵衛尉
為光
箕勾総領家

鬼窪
常光

鬼窪
常能

大相模
須久毛

柏崎
神倉

古志賀谷

萱間

白岡
八条

大相模
須久毛

柏崎
神倉

古志賀谷

黒浜
佐那賀谷
黒浜
江ヶ崎

以上千葉大系図

(房総叢書)

野與党系圖 (略)

桓武大天皇

三代略

村岡五郎
良文
坂東諸平氏祖

村岡次郎
忠頼

千葉

恒

恒

將

千葉小太郎
常永

周防八郎
元宗

野與庄司
近永

奥州之役戰死
恒永

野與党祖
胤宗

元宗

野與六郎
基永

小太郎
基行

多名六郎大夫
長綱
鬼窪六郎
定綱
萱間六郎
弘光

大藏二郎
恒宗

道智法華坊
頼意

平大夫
頼基

道智・多賀谷・道後・笠原

九郎大夫
経長

新大夫
行長

大藏二郎
行高

大藏
大藏・西脇

鬼窪
鬼窪六郎

鬼窪

南鬼窪小四郎
行親

小太郎兵衛尉
頼家

鬼窪
白岡

二郎太郎
経光

二郎
経能

太郎
能元

箕勾二郎
経為

又太郎兵衛尉
経為

同兵衛太郎
経光

箕勾総領家

能高
能高・大相模

柏崎
神倉

二郎
基

(古志賀谷?)

須久毛六郎
経元

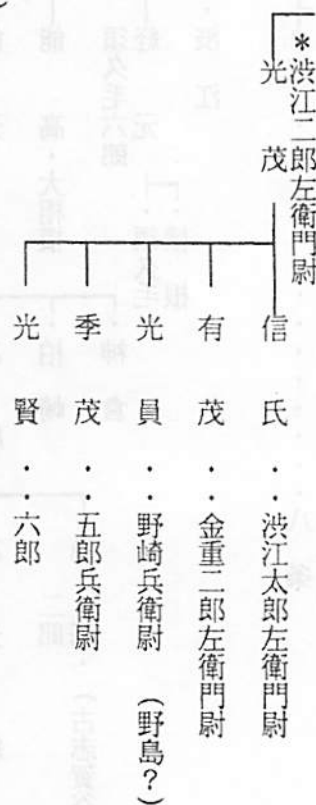
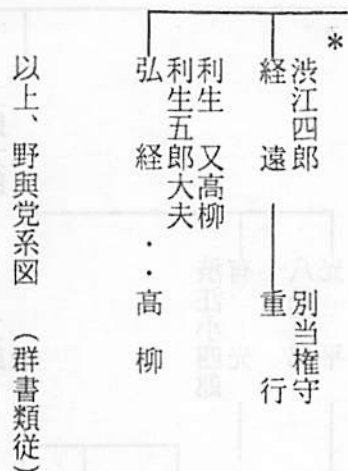
須久毛
横根

二
基

八条五郎
光平

有光
有光

八条



前期の野與党

「千葉大系図」では、平良文より分派する、坂東八平氏の内、平良文の孫千葉上総介忠常——の四子武蔵四郎胤宗、分派して野與党の祖と云われる。

その子太郎元宗——基永野與六郎を称す、此処までで野與系は切れる。

上総介忠常の長子——上総権介常将が千葉氏初代——下総権介常長が二代その八子に——周防八郎大夫常継——その子近永野與庄司を称す、で野與系は切れる。

千葉二代下総権介常長その十子に 十郎行長号龍大夫を称し、◎大蔵二郎常宗と渋江四郎常光が見える。

註、◎大蔵二郎常宗は、野與党系図には、野與庄司近永の子に、恒永奥州役戦死と大蔵二郎恒宗兄弟が見え、常恒の違いはあるが、同人であろう。

この、◎常宗は大蔵二郎を称し、龍大夫行長の長子として千葉大系図に載せ、大蔵を継がしている。

「野與党系図」では、平良文の子忠頼より分派して、△千葉忠恒と●四郎胤宗野與党ノ祖とに分る。

註、●四郎胤宗「相馬系図ニハ忠恒ノ子」とあり、千葉系図に従うと、同一と考えられる。

△千葉忠恒——恒将——◆千葉常永——周防元宗——野與庄司近永——恒永戦死、其の弟◎大蔵二郎恒宗で切れる。

●四郎胤宗——太郎元宗——▲野與六郎基永より分派して——★①野與小太郎行基と②道智頼意法華房と◆九郎大夫経長に分れる。

★①野與小太郎行基より分れて、③多名長綱・④鬼窪定綱・⑤萱間弘光の三兄弟に分派している。

以上の如く、①野與・②道智・③多名・④鬼窪・⑤萱間氏系譜に記載される氏族が、前期野與党である。

「千葉大系図」と「野與党系図」は共に常長迄、常恒ニ経、又、長ニ永等、多少の相違点は有るが、ほぼ同一として対比する事が出来る。

千葉大系図

武蔵押領使忠常——千葉初代常将

——二代常長

野與党系図

千葉 忠 恒

—— 恒将

—— 千葉小太郎常永

前期野與党の総領家、野與庄司近永の子恒永が、「奥州ノ役ニテ戦死」したので、総領家が絶え無い為の処置として、千葉宗家から野與党の束ねとして派遣されて来たのが、十郎行長号龍大夫である。

野與恒永の弟恒宗は三箇大蔵に別家して、大蔵二郎を称したもので、総領権の移動と見る可きであろう。

後期の野與党

後期野與党で重要な人物は、新大夫行長である、千葉大系図の行長と野與党系図の行長は別人に見えるが

千葉二代常長の子——十郎行長号龍大夫

九郎大夫経長の子

—— 行長

—— 新大夫

又、常ニ恒ニ経 この違いを同一と見れば、ほぼ対比する事が出来、両系図の、千葉二代常長とその子、九郎大夫経長と同一人物と見る事が出来る。

又、十郎行長号龍大夫と行長新大夫も、同一人物と見る事が出来る。

龍 —— 利生、又八高柳

龍蔵権現・利性院・利生大夫は、龍大夫の「龍」と同一で、後期野與党の高柳氏を又利生（りゆう）とも云い行長の子となっている。

千葉大系図は、野與六郎基永以後、又野與庄司近永以後は、千葉宗家から見れば末葉の為か、前期の野與党系譜は記載されていない。

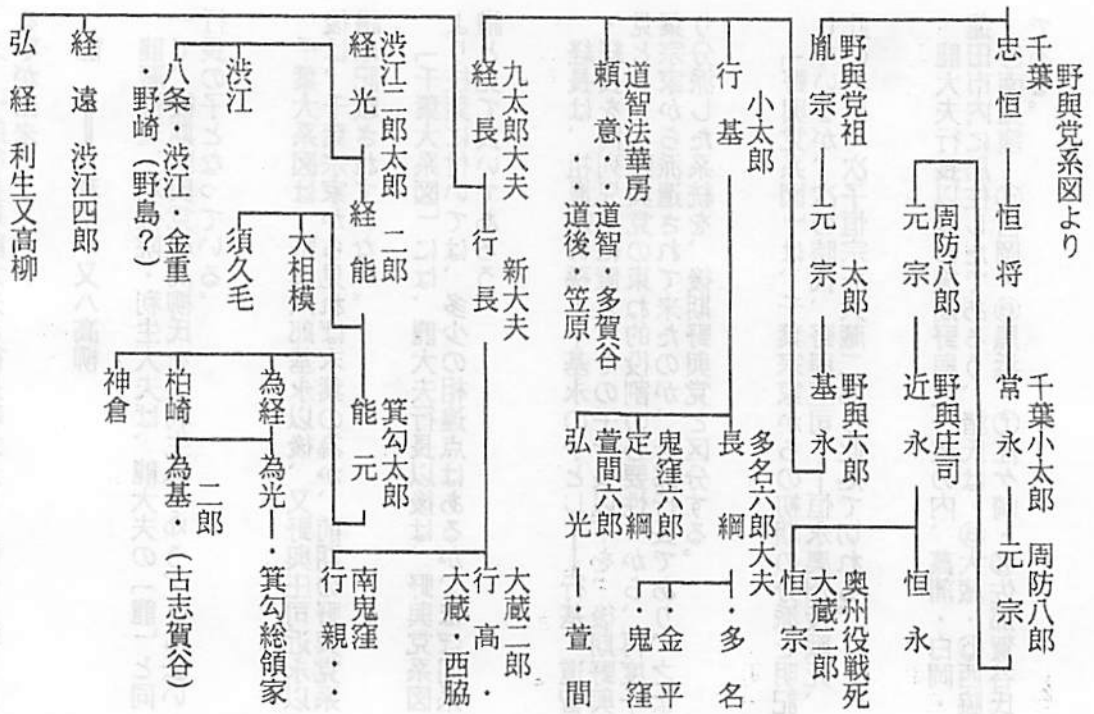
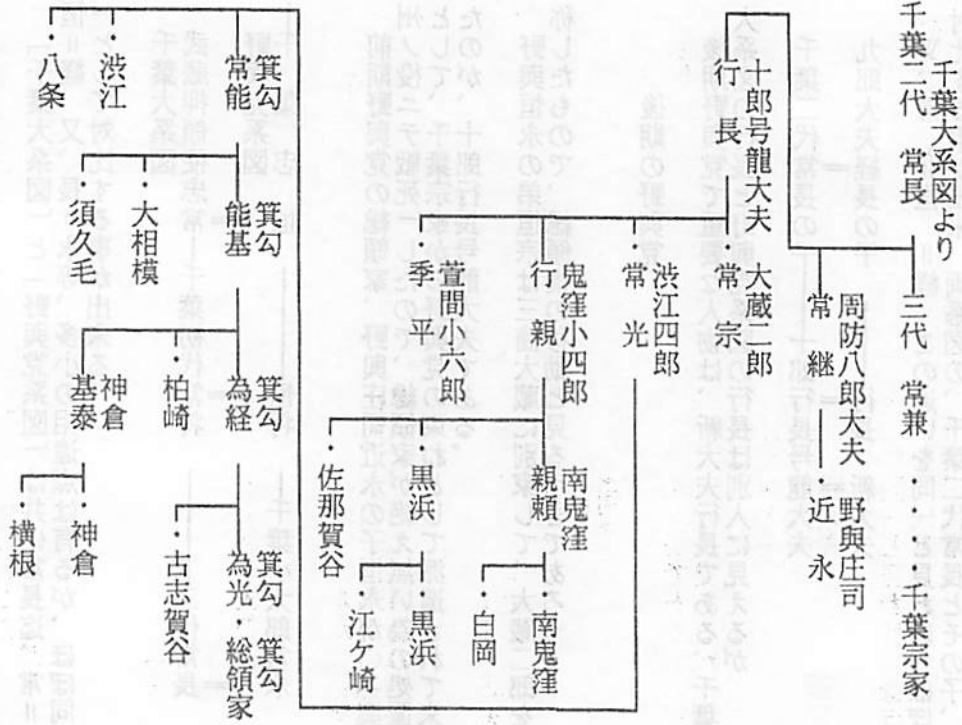
「千葉大系図」には、龍大夫行長以後は、野與党系図より枝葉に付いては、多少の相違点はあるが、ほぼ同系譜と見て良いであろう。

経長は、祖胤宗の孫——基永の子とし——行基・道智・経長を同列兄弟に置き、その子行長以下を、後期野與党とし、「野與党の束ね的役割の必要性」から、再度千葉宗家から派遣されて来たのが、十郎行長であり、之より分派した系統を、後期野與党と区分する。

「野與党系図」は、千葉宗家からの初期の分派を明記しているが、次の時代、野與庄司——恒永奥州役戦死、此の為に、次子恒宗を大蔵二郎し此処で切れる。

龍大夫行長以後の後期野與党一族の内、葛浦・白岡・蓮田市内に居住したであろう、諸氏は ①大蔵・②西脇・③南鬼窪・④白岡・⑤黒浜・⑥江ヶ崎・⑦佐那賀谷氏である。

「千葉大系図」と「野與党系図」の対比



菖蒲町

菖蒲町は、埼玉県の東部に位置し、都心から四十五キロ圏に入り、町の東に久喜市、南は白岡町・蓮田市、西は桶川市・鴻巣市、北は騎西町・加須市に接している。

町の広さは、東西七・五キロ、南北五・九キロで、総面積は、二七・三平方キロとなっている。

地形は、海拔十三メートル、西北より東北に向かって二十分の一の緩い傾斜地をなしており、比高一〜二メートルの起伏のある微高地と低地から出来ている。

菖蒲町を流れる主な河川としては、星川・見沼代用水・備前掘川・野通川・赤掘川・元荒川・黒沼笠原用水・庄兵衛掘川などがある。

元荒川は、元は荒川の本流であったが、寛永六年（一六二九）関東郡代伊奈半十郎忠治が、大里郡久下村で荒川を締切り、和田吉野川の川筋を広げて、入間川へ導入したもので、今は元荒川と呼ぶ古い河川で、自然堤防が良く発達し、台地の間を南東に曲流している。

見沼代用水は、八代將軍吉宗の命により、勘定吟味役井沢弥惣兵衛為永により造られた河川で、浦和・大宮の東部に在った、見沼溜井に代わる用水として開発された河川である。

当町に在った、沼池は、元禄期の絵図によれば低地部に、小林沼・栢間沼・河原井沼等の大きな沼池が見られるが、新田開発や、耕地整理又は、工業団地・宅地等の造成により、其の影を見る事が出来なくなった。

菖蒲町は、昭和二十九年の町村合併により、菖蒲・新掘・小林・下栢間・上栢間・柴山枝郷・上大崎・三箇・台・河原井・昭和沼の大字名となる。

当町には、鉄道が通じていない為、バスが唯一つの交通路であり、道路は一二二号線が町の中央を横切り、又周囲の市町を結ぶ道路の要路にあたる町である。

菖間氏

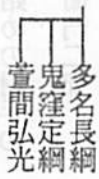
栢間地区に住した、野與党系の氏族は、栢間の地名を名字に冠した菖間氏である。

菖間氏の居住した拠点は、下栢間地内の久伊豆神社附近と沼尻であろう、沼尻には古城跡がある。

「野與党系図」では、野與行基の子に鬼窪六郎定綱その弟菖間六郎弘光とあり、前期野與党に属する。

「千葉大系図」では、龍大夫行長の子に南鬼窪小四郎行親、その弟に菖間小六郎季平とし、後期野與党と云う事になるが、前期が正しいか。

野與党祖胤宗 — 野與基永 — 行基



暦仁元年（一一三三）頼経將軍上洛に随ひし左近將監季直、正嘉二年（一二五八）正月大的始に射手を勤めたる菖間左衛門二郎は其の子孫也。

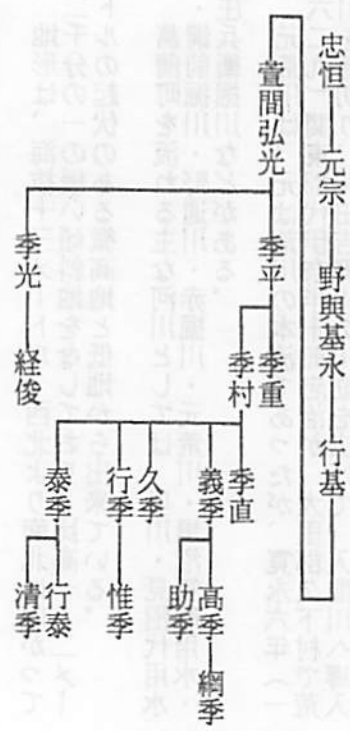
姓氏家系大辞典では、菖間・栢間、武蔵南埼玉郡菖間村より起る。野與党系図に、「野與六郎基永 — 小太郎

行基——弘光（萱間六郎）——小太郎季平——太郎季重、弟「左衛門尉季村」——左近將監季直、弟「平内義季」——十郎高季——平内左衛門綱季。高季の弟に「助季」

義季の弟に「五郎左衛門入道久季、久季の弟に「六郎左衛門尉行季」——三郎左衛門惟季、行季の弟に「七郎左

行季の弟に「七郎左衛門泰季」——二郎左衛門行泰弟に三郎左衛門清季。又季平の弟に「四郎季光」——経俊」が記載される。

栢間氏系譜 野與党系図（略）



吾妻鏡に見える栢間氏に付いての記述は、

吾妻鏡

「第廿二嘉禎四年（一一三三）二月十七日、御入洛の随兵廿一番に栢間左近將監

第廿四武蔵野開墾、奉行人の監視に、栢間左近將監

仁治二年（一一四一）十二月廿四日多摩河を掘通、其の流を堰上げ、武蔵野に水田を開く奉行として、栢間左衛門尉・多賀谷兵衛尉・恒富兵衛尉等下向、

第四十、閑院内裏造営の雑掌分担目録
建長二年（一一五〇）三月一日一本栢間左衛門入道

第四十八、的始め射手を定む。

正嘉二年（一一五八）正月六日、御的始めの射手の事内々に人数を定めらる。射手の風紀十二人、栢間左衛門二郎

第四十九 由比の浜に射的御覽 栢間左衛門二郎
正元二年（一一六〇）（文応元年）正月十二日、浜に於て御的射手の試しあり、十三人十五度射る。射手六番に 栢間左衛門尉次郎

第四十九 弓始
正元二年（一一六〇）正月十四日、今日弓始也、二十五度、射手十二人、六番 栢間左衛門次郎季忠

第五十一 前浜にて射手を選ぶ。
弘長三年（一一六三）正月八日、左典（時宗）所勞によつて出仕せられず、十八人十五度射を張りて退散すと云々。七番 栢間左衛門次郎

第五十二 弓始
文永二年（一一六五）正月十二日、御弓始あり、射手 三番 栢間左衛門次郎行泰

第五十二 弓始
文永三年（一一六六）正月十一日、昨夜より雪降。午の刻、霽に属す。今日御弓始めあり。射手 三番 栢間左衛門次郎

第五十二 弓始
文永三年（一一六六）正月十一日、昨夜より雪降。午の刻、霽に属す。今日御弓始めあり。射手 三番 栢間左衛門次郎

第五十二 弓始
文永三年（一一六六）正月十一日、昨夜より雪降。午の刻、霽に属す。今日御弓始めあり。射手 三番 栢間左衛門次郎

第五十二 弓始
文永三年（一一六六）正月十一日、昨夜より雪降。午の刻、霽に属す。今日御弓始めあり。射手 三番 栢間左衛門次郎

第五十二 弓始
文永三年（一一六六）正月十一日、昨夜より雪降。午の刻、霽に属す。今日御弓始めあり。射手 三番 栢間左衛門次郎

第五十二 弓始
文永三年（一一六六）正月十一日、昨夜より雪降。午の刻、霽に属す。今日御弓始めあり。射手 三番 栢間左衛門次郎

第五十二 弓始
文永三年（一一六六）正月十一日、昨夜より雪降。午の刻、霽に属す。今日御弓始めあり。射手 三番 栢間左衛門次郎

栢間村 附持添新田

栢間村は、太田庄(騎西庄?)に属し、郷名は伝えざれども、郡内笠原村に載せし康暦三年の文書に武蔵国騎西郡内笠原村とあり、又或る書に載する応永六年の文書に、当所の名見えたり。

鳩井美濃三郎入道浄景申、武蔵国埼玉郡栢間郷内政所・石程島・沼尻三ヶ村事、可有其御沙汰、不日可^レ使之状、依仰執達如件、
応永六年九月廿九日

沙弥(花押)

是等に拠ば中古郷名にも唱へし事知べし、元より栢間の名は上古より聞えし地名にて、当国七党之内野與党の系図に、野與小太郎の三男を、萱間六郎弘光と云、

其の子季平其男太郎季重を始とし、萱間氏之者数輩見えたり、今栢間と書、唱にはかやまと呼べり、されば文字は違へど、同く此地名に依て唱へしにや

又「東鑑」にも萱間左衛門次郎季忠或は栢間左衛門次郎行泰と云人見ゆ世を以て推に、正嘉頃の人也其内左衛門次郎行泰は、既に七党系図にも見えたれば、栢間の名古き事疑無、

又前の文書に載る所の政所・石程島の地名今無、沼尻の名今村内小名に唱れば其地なる可、

檢地は、正保三年地頭内藤が家にて改めり、又村の東に持添の新田あり、其地元は大沼なりしが、享保十三年并沢弥惣兵衛命を蒙りて開発し、暫段錢を貢しを、延享三年神尾若狭守檢地して高入となり、此地始より御料地にて今に然り、

小名 沼尻 村の東にあり・小竹 村の西にあり・

養静寺 古は寺ありし地なれども伝無し・

足軽町 村の西を云元地頭の足軽住せし地・

戸 宮原・天沼・内袋・宿・本郷・在家・宮ヶ谷

陣屋 村の西にあり、横一町、豎三町の地なり、四方に垣を結廻せり、内藤四郎左衛門正成此の地住し、後旗下一統江戸に移り、此処は留守居として在住の家人一人、其の後江戸より交代して守らしむ、今に至りて然り、

神明社 村の鎮守、正月十四日筒かゆの神事を行なひて年の豊凶を占を以て例祭とす、妙法院持。

久伊豆神社 梅松院持也、

古城蹟 村の東の方小名沼尻にあり、今田畑となり昔の境界分ち難し、古くは鳩井將監と云者、此所に住せしと云。

村内正法院の熊野社に蔵す、永禄十三年の棟札に、大壇那鳩井殿息女鍋殿と載たれば、その頃迄は鳩井氏住せし事明けし、

又同郡笠原村に出せる、康暦三年・応永六年の文書に、鳩井美濃三郎入道浄景申、武蔵国騎西郡栢間郷内政所等云々を以て考れば、鳩井が当所に住する事、已に古き事知る可、

善宗寺 浄土宗、京都智恩院末、寺領五十石慶安二年十月十七日、御朱印を賜ふ、国豊山天龍院と号す、開山は地頭四郎左衛門正成が草創にて、今も菩提所となせり。正成法名は天龍院殿源善善宗居士と称す、開山は了蓮社覺善なり、本尊阿弥陀を安ず。

善宗寺 浄土宗、京都智恩院末、寺領五十石慶安二年十月十七日、御朱印を賜ふ、国豊山天龍院と号す、開山は地頭四郎左衛門正成が草創にて、今も菩提所となせり。正成法名は天龍院殿源善善宗居士と称す、開山は了蓮社覺善なり、本尊阿弥陀を安ず。

○秋葉社・天神社・阿弥陀堂・観音堂・鍾樓には延宝五年八月、大壇那内藤外記正重之寄附の鐘を懸く。

幸福寺 禅宗曹洞派、上野国邑楽郡掘工村茂林寺末寺領十石慶安二年十月御朱印を賜う、光明山と号す、古は天台宗にして村内妙法寺・宗徳寺は皆当寺の寺中なりと、

延徳元年当宗に改宗、夫より前の出来事は伝へず、改宗の僧漱桂正香禪師を開山とす。
大永三年十一月五日寂す、中興僧中學異大は、天文十七年二月五日寂す、本尊十一面を安ず。

大御堂 弥陀を安ず、此の堂を掘河山妙法寺と号。是往昔当寺の塔頭なりしが、何時頃か境内の堂宇となりと云々、此の堂宇大同元年の造立の俣と云、其の造り様古色にして古き事疑いなし。

弁天社・鍾樓・正徳三年新造の鐘を懸る。

桜樹 一株客殿の庭にあり、単弁垂枝にして囲一丈三尺、高三丈余、東照宮比企郡三保野谷養竹院移植し賜う、樹下に東照宮御前桜と記せり。

宗徳寺 幸福寺の門徒、元幸福寺の寺中なれば古き寺なる事知る可、然も開山を伝ず、本尊薬師

正法院 新義真言宗、足立郡上深井村寺命院末、寺領十石八斗は、慶安二年賜ふ、慈眼山と号す。僧円俊文明中草創と云ふ、本尊不動を安ず。

観音堂長さ三尺許、立像の正観音を安ず、行基菩薩の作と伝、文明年中の棟札あり。

地藏堂・熊野社社中に永禄十三年庚午三月十一日秋葉社天神社阿弥陀堂観音堂鳩井息女鍋殿とあり、鳩井氏の事当寺に由緒を残すも、他の伝無し。

鍾樓 延享五年の鐘を懸。

正福寺 新義真言宗、正法寺の末、金花山と号す、本尊大日を安ず。

○愛宕社・牛頭天王社・弁天社・薬師堂

蓮華院 当山修験、京都三寶院末、稲荷山と号し、開山清弁と云、本尊不動を安ず。

梅松院 新義真言宗、足立郡上深井村寺命院末、昌蔵山延命院と号す、本尊地藏を安ず。

威王院 羽黒行人派、江戸日本橋音羽町普門院配下本尊大日を安ず。

旧家者庄右衛門 先祖を福田幸十郎と云、因幡守某が次男、成田左衛門尉泰親に仕える。

天正十七年七月二日、三十七才にて死、文書一通載す、

本分 十四貫式十五文 福田幸十郎
島四町五反 六貫七百五十文 小竹 長沢分

以上式十貫七百五十文
右差置者也、仍如件、

天正四年丙子九月十九日

福田 幸十郎 殿

栢間地区の板碑

幸福寺

下栢間 7

元享元年 一三二一 八月

破片

弥陀一尊 蓮座

文安元年 一四四四 正月廿一日

破片

弥陀一尊 妙清禪尼

文二年

破片

弥陀一尊 蓮座

安四年

破片

種子一部 法口

破片

弥陀一尊 三弁宝珠

齋藤義一 一四六一

破片

下栢間 7 禅門

大野善三郎

破片

幸福寺裏大野氏畑地

善宗寺

破片

下栢間 2639 月輪日月

貞治二年

破片

光明真言 蓮座

破片

八月

光明真言 蓮座

破片

阿弥陀一尊 天蓋

破片

阿弥陀一尊 蓮座

破片

阿弥陀一尊 蓮座

破片

阿弥陀一尊 蓮座

破片

阿弥陀一尊 蓮座

破片

阿弥陀一尊 蓮座

八月

破片

阿弥陀一尊 蓮座

大野二三雄

破片

下栢間 2639 蓮座

藤村昭作

破片

下栢間 2448 蓮座

栢間小学校

破片

下栢間 2720 蓮座

関根孝之

破片

下栢間 2049 蓮座

正和四年

破片

阿弥陀一尊 蓮座

正和四年

破片

阿弥陀一尊 蓮座

明德三年

破片

阿弥陀一尊 蓮座

弘安六年

破片

阿弥陀一尊 蓮座

貞和四年

破片

阿弥陀一尊 蓮座

弘安五年

破片

上栢間天王山 3285 蓮座

岡田起七

明応八年一四九九 〇月十五日 弥陀三尊 〇妙正禪尼

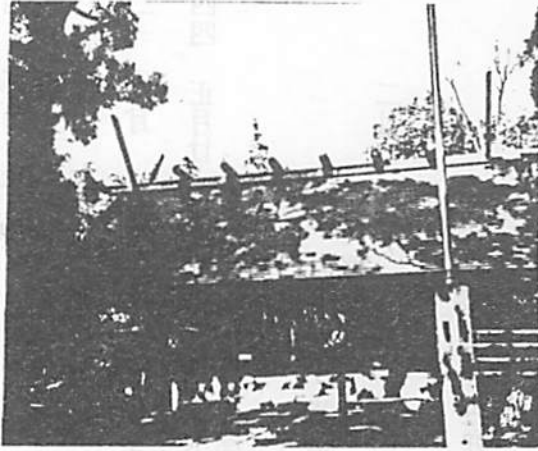
石井禎一

明応二年 一四九二 辛未十月日 弥陀三尊

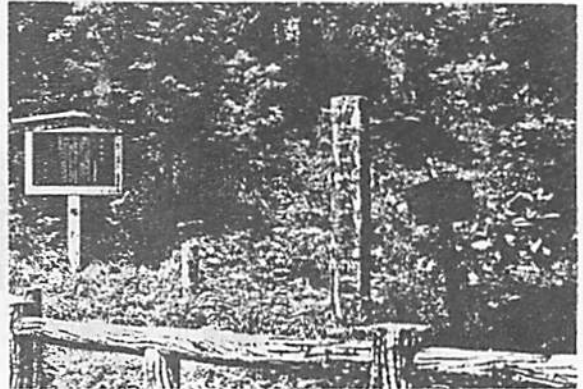
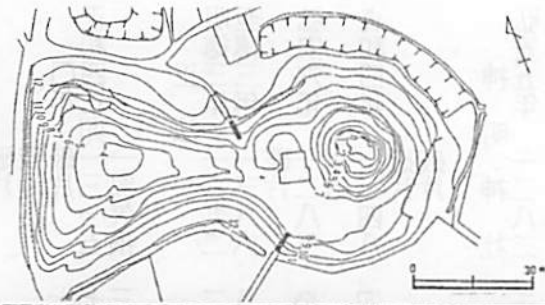
淨智住寛性覺妙歎道覺
教法敬信道妙行 〇

小林村

小林村は、栢間村の東で、栢間沼を挟んで対岸の村である。葛蒲町新掘村とは、三掘代用水にて境する。栢間村沼尻に萱間氏の城跡が在るので、萱間氏の一族の住居地で在ったかは不明であるが、其の後の支配も栢間村と同じである。



栢間神明宮



天王山塚古墳

新編武蔵風土記稿

卷二百八

葛蒲領

小林村

小林村は、古は、葛蒲庄と唱へりと云、寛永八年の水帳に、埼玉郡葛蒲庄と載せたれば、其の頃迄も尚庄名なりしが、其の後転じて領名になれり。

小田原北条分国の頃は、小林周防守が領せし事伝へ、且村内妙福寺の鬼簿にも、小林周防守法名蓮心居士、小林凶書頭法名蓮宗居士と載たるを見れば、是等当所を領し、此処に居住し、在名を称せしなるべし、今小林を称する者五軒あり共に周防守が家より分れし者と云。



下栢間関根孝之氏方板碑

成田分限帳に、百貫文小林監物、拾貫文小林図書等載たり、是等も周防が一族にて、当所に住せし者なるべし。

小林村は、東は柴山村、南は、栢間村、西は笠原村、西北は下種足村、北は新掘村なり。外に持添新田二ヶ所、一は、享保十三年栢間沼を開発し、松平大和守の領分とし、一は小林後沼新田とし、享保十四年御料所となる。

小名 野ノ宮・木間金・京手・上本村

妙福寺 日蓮宗下総中山法華經寺末、延命山と号。

慶安二年廿一石を賜。本尊三宝祖師を安。

平野明神社・三上明神社・八幡社・稻荷社天神社
三十番神堂・鬼子母神社・七面社・塔頭 七堂

正眼寺 禅宗曹洞派。 東陽院 新義真言宗。

小林地区の板碑

正宝院 破片 小林 3488 蓮座枰線

大塚正司 弘安? 妙福寺 小林 1132 阿弥陀三尊 蓮座

應永十年 一四〇三 九月 左志者僧日皆聖王 敬

南無多宝如来鬼子母神 敬

文安六年 一四四九 己巳二月廿八日 南無釈迦牟尼十羅刹女 白 枰線



栢間城跡・沼尻弁天社

大藏氏 (前期野與党)

大藏氏の入居した拠点に付いては、比企郡大蔵を指す向きがある、姓氏大辞典にも、「大蔵氏、比企郡大蔵より起ることし」と記載されている。

然し乍、野與党の入居地は騎西郡であり、其の一族も皆一様に、騎西郡中の村落名を名字に冠して名乗っている、一人大蔵氏のみが「比企郡大蔵より起る」のでは不自然である。

大蔵氏の拠点は、三箇村の大蔵久伊豆神社より長龍寺附近を推定したい。

三箇村大蔵は、野與党の祖、胤宗——野與六郎基永等野與氏の発祥の地、篠津・野牛とは、隣接した地域であり、野與党諸氏の分派の状況から見て、比企郡大蔵と比定する依りも、三箇村大蔵の方がより自然であろう。

註、新編武蔵風土記稿に、「三箇村は、明応(一四九二)五〇〇の頃、辻・寺中・大蔵の三ヶ村を合せ一村となせし故の村名と云」と記している。

大蔵氏の拠点に関する資料は、皆無に等しいが、地形等から推理して見ると、次の如くなる。

① 龍大夫行長の痕跡は、上大崎神倉龍蔵権現社附近。

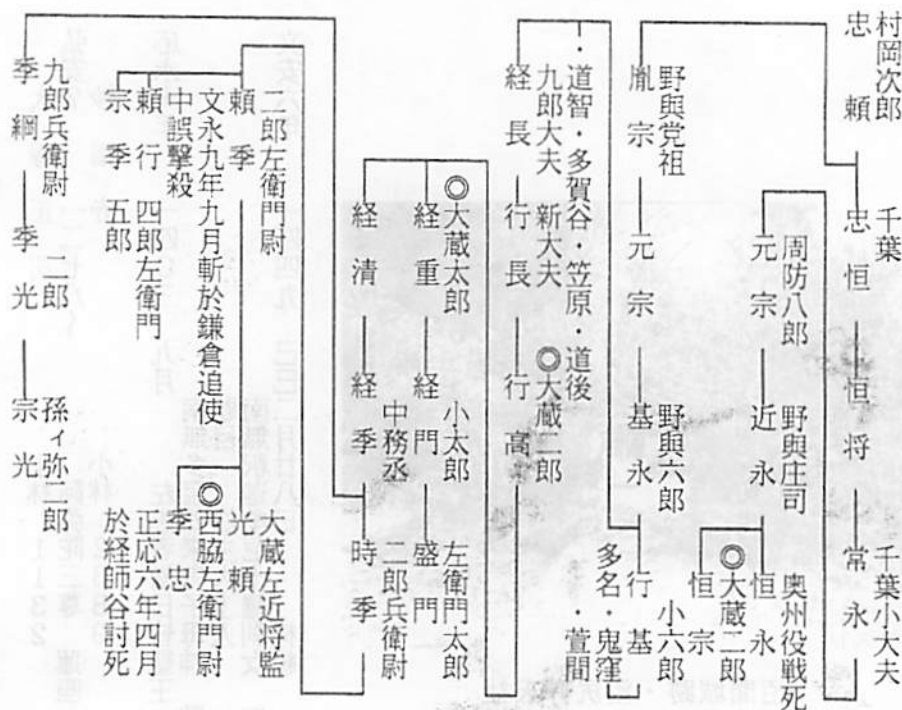
② 前期大蔵氏は、三箇大蔵の大蔵久伊豆神社附近。

③ 後期大蔵氏は、三箇神社附近が想定出来る。

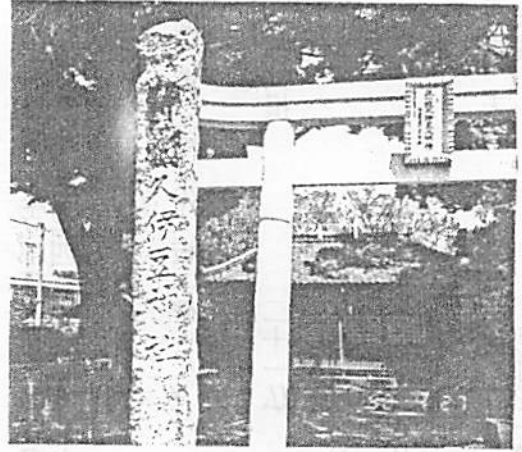
④ 西脇氏は、新堀の久伊豆神社辺が想定出来る。

以上、大蔵氏の拠点に関する推理である。

大蔵氏系譜 野與党系図 (略)



「野與党系図」に於ける、大蔵氏の系譜は以上の如くであるが、大蔵氏の拠点到付いては、菖蒲町三箇に大蔵の小字名が今も残る。



大蔵久伊豆神社

前期大蔵・後期大蔵・西脇氏の拠点は、此れ等を結ぶ一直線上に、嘗ての旧道が通り、大蔵・辻・寺中・菖蒲・新掘地区が線上に連なっている。

1、三箇小学校の近く大蔵に、大蔵久伊豆神社があり、阿弥陀堂・久伊豆神社・明昌寺・長龍寺・永勝寺等が並び、前期大蔵氏の拠点と推定出来る。

2、菖蒲町東小学校隣りの、三箇神社・菖蒲久伊豆神社・青龍権現社があり、後期大蔵氏の痕跡があるので、其の拠点かと思はれる。

3、新掘地区には、新掘久伊豆神社・永昌寺・南蔵院・十二所権現社あり、後期大蔵氏の枝族西脇氏の拠

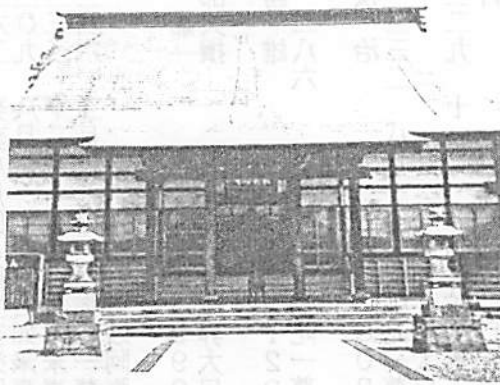
点かと思われ附近所から、多数の板碑を確認する事が出来る。

新編武蔵風土記稿 卷二百八に 菖蒲領

三 箇 村

三箇村 菖蒲庄の唱あり、此地明応の頃、辻・寺中・大蔵云へる三ヶ所を会わせて一村となせし故の村名なりと云、今も是等の村名残す小名にあり。

小名 辻・寺中・大蔵・蔵前・浅間前・金山・愛宕前



三箇大蔵長龍寺

金山明神社 村の鎮守也、天王社共に永勝寺の持也。

長龍寺 禅宗曹洞派、伊豆国加茂郡宮下村最勝院末、

慈高山と号す、寺領十二石は慶安二年十月賜へり、開山存齋永正十六年十月廿日寂せり、本尊

十一面観音を安ず。 鍾楼 鐘は寛文二年鑄造なり。 阿弥陀堂。

明昌寺 長龍寺の末、大蔵山と号す、本山は本寺五

世協翁天正四年十月廿二日寂、本尊釈迦を安。 閻魔堂

永勝寺 同寺の末、功德山と号す、本尊地藏を安。

東光寺 新義真言宗、戸ヶ崎村吉祥院末、医王山と

号す、開山真慶元禄九年二月十五日寂せり、本尊不動を安ず。 薬師堂

清浄院 当山派修験、足立郡高尾村泉龍寺の配下也

開祖良広は寛永十七年四月十七日寂すと云、本尊不動を安ぜり。

三箇地区の板碑

小山 進 三箇 871

一部欠損 二十一仏

永勝寺 三箇 898

破片 阿弥陀一尊 天蓋蓮座

破片 阿弥陀一尊? 蓮座

森山岩夫 三箇 905

破片 阿弥陀一尊? 宝珠

長龍寺 三箇 998

弘長二年 一二六三 癸亥八月日 往生安楽国聖靈□

延慶二年 一三〇九 八月 大日如来真言 蓮座

元弘三年 一三三三 十二月 大日如来真言 蓮座

貞和二年 一三四六 二月廿九日 阿弥陀一尊蓮座 妙阿弥陀仏逆修

細田 嘉 三箇 999

一部欠損 金剛界大日 三箇 1294

葉山 勝雄 阿弥陀一尊 蓮座

弘安九年 一二八六 荒川 檢治 台 802

正慶元年 一三三二 八月 日 阿弥陀一尊? 大日如来真言 蓮座

元徳□年 一三二九 十一月 月 阿弥陀一尊? 蓮座

永正 破片 阿弥陀一尊? 蓮座

破片 凶像地藏? 蓮座

破片 阿弥陀三尊? 蓮座

破片 不明種子 二条線棒

阿弥陀堂 長龍寺 台 795

貞□五年 一三六六 正月十日 金剛大日 □□□□

宮島 林之助 九月廿三日 阿弥陀三尊 1723

文明十七年 一四八五 三郎九郎 四郎二郎

平七 二郎 ひこ五郎

彦五郎 九太郎

との三郎 又四郎

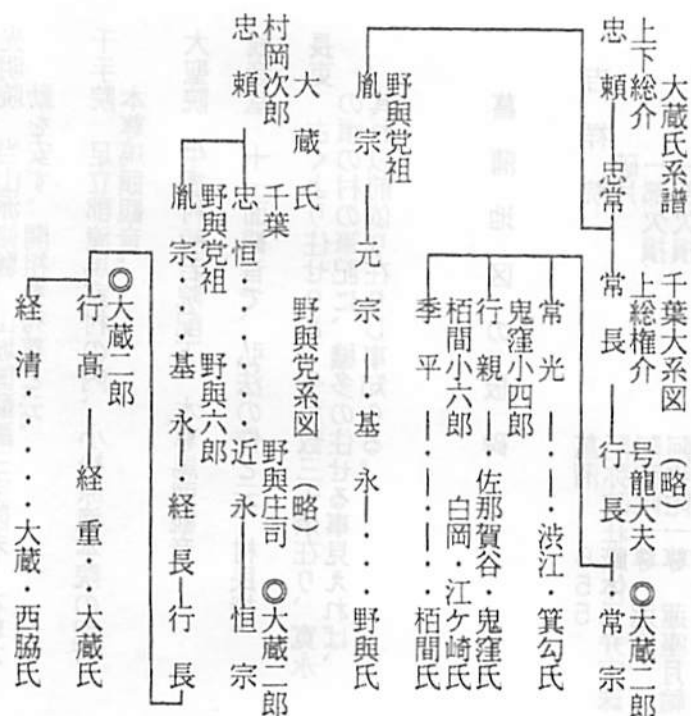
大藏氏 (後期野與党)

後期大藏氏の拠点は、三箇神社・菖蒲宿地域である。後期野與氏の祖は、行長で(野與党系図では経長)千葉系図には、行長の子として大藏二郎常宗を載せ、弟として渋江四郎常光、其の弟に南鬼窪小四郎行親を載せている。

野與党系図では、野與庄司近永の二子、大藏二郎恒宗を、別家として載せている。新大夫行長の子、行高が大藏二郎と名乗り、大藏に入居し、子孫の大藏氏は其の後、六家に別れ繁栄する。



三 箇 神 社



名号板碑 長福寺(菖蒲) 歴応2年(1339)

葛蒲町

葛蒲町は、村内巽より乾方に通ずる町にて、古は宮宿と唱えしと云。享保の頃より本町の他横町も出来、次第に家屋建ち連り、繁栄の地と成れり。

小名 馬場・中井・陣屋・掘の内・登戸・塚田新田

袋田明神社 祭神稲田姫命、神体銅鏡、本地薬師像彫れり。鷲宮・久伊豆の両社合殿、吉祥院持。

稻荷天神合社・雷電社・大黒天・金毘羅秋葉聖徳太子合社、○稻荷社・三所権現社 村民持

吉祥院 新義真言宗、山城国醍醐報恩院末、袋田山安穩寺と号す、本尊不動立像にて長三尺余、弘法大師の作と伝。開山は弘鑽、開基は、古葛蒲城主佐々木源四郎也。

寺宝 法華経一軸 武蔵坊弁慶の筆と云、弘法大師筆と伝る不動像・愛染像を什宝とせり。

鐘楼 元和八年鑄造の鐘を懸る。

弁天社・稻荷天神青龍権現合社・地藏堂 地藏像は伝行基と伝、○薬師堂 ○阿弥陀堂

慈眼院 吉祥院の末、愛宕山観音寺と号す、本尊不動を安ず。

観音堂 十一面観音にて、行基の作と云。

長福寺 熊野山と号す、開山は弘鑽、本尊毘沙門天を安ぜり。阿弥陀堂

延命院 若宮山と号す。本尊地藏 地藏堂

○常照庵 本尊弥陀 真如庵 騎西町大英寺持、馬頭観音を安ず。

光明院 当山派修験、山城国醍醐三宝院末、本尊不動を安ず。開祖を秀尊と云。

千手院 足立郡滝馬室村の内、小松原滝本院の配下本尊馬頭観音。

大聖院 牛重村般若院配下、本尊馬頭観音。

観音堂 十一面観音で、弘法の作と云、村民持。

長史 古くより住せりと、今戸数三十余在り、寛永の頃の村の筆記に、穢多の住せる事見えれば、其れ以前依り在りし事知らる。

葛蒲地区の板碑

吉祥院

破片

一部欠損

一部欠損

小島 釣 吉
□□□□年 破片
教育委員会

弘安三年 一二八〇

河野 靖

德治三年 一三〇六
応長元年 一三一六
永徳四年 一三八四

葛蒲 655
阿弥陀莊骸体三弁宝珠
阿弥陀一尊 蓮座
阿弥陀一尊 蓮座月輪

葛蒲 4585
十二月 安楽国 梓線

葛蒲 236
阿弥陀三尊 蓮座

葛蒲 705
大日如来真言

破片 光明真言蓮台

破片 光明

念仏

念仏

念仏

西 脇 氏

西脇氏の拠点は、新掘久伊豆神社及観音寺・南蔵院の附近と思える。

西脇氏は、吾妻鏡と野與党系図に出て来る、然乍ら、其れ等からは、拠点に付いては、確定出来ない。

「武蔵武士」に「相模の西脇氏、前項の裔なり。小田原分限帳に西脇外記知行、沼間斎藤分十貫文」と有るも即、相模国西脇氏では首肯出来難い。

大蔵氏に付いて、先に比企郡大蔵を否定し、騎西郡の菖蒲町三箇大蔵を、其の拠点と推論したが、西脇氏に付いても同一の推論が成り立ち、隣接の新掘地区を西脇氏の拠点として上げたい。

野與党諸氏の名は、其の入居地の地名を名字としているが、藤原氏等は本家を中心として、門の脇に分家したので門脇氏とか、左に分家したので佐藤・内藤・近藤氏等の名字が多く見られる。

西脇氏は、本家大蔵氏から見て西に分家したので、西脇氏と名乗ったのでは無いだろうか。

大蔵氏の拠点、三箇神社辺から見て、新掘地区は隣接地で西に当たり、以上の推論が符合するので、西脇氏の入居地は新掘地区に比定したい。尚、同地区から板碑の所在が多数確認されている。

新編武蔵風土記稿

卷之二百八

菖蒲領

新 堀 村

新堀村は、民戸百十五戸、領主の変遷、江戸への里数用水等、菖蒲町に同じ。

小名 矢足・宿・後新田・寄居・五軒屋敷

沼 村の南にありて、小林村と入会の持、

南蔵院 新義真言宗、戸ヶ崎村吉祥院末、愛宕山福寿寺と号す。中興開山快印天和三年寂すと云。本尊不動を安す。

愛宕社・山王社・天神社・観音堂・稻荷社同寺持

観音寺 同末にて大悲山と号す。本尊阿弥陀を安す。

観音堂 天神社・稻荷社 二字・十二社権現社・愛宕社・弁天社 以上六社観音寺持、

久伊豆神社 二字 共に村の鎮守にて、一は南蔵院持、一は、観音寺持、

西願寺 浄土宗、足立郡鴻巣宿勝万靈山と号。本尊阿弥陀を安す。 太子堂

永昌寺 禅宗曹洞派、白岡興禅寺末、久林山と号す。

開山は、当寺二世僧楚清、文龜元年正月廿四日寂す。本尊釈迦を安す。 白山社・観音堂

城 蹟 村の巽方に在り、今陸田となる。段別凡そ一町余、村民五郎右衛門はもと佐々木氏の者にて、今は大塚を氏とす、其の家系を見るに、康正二年丙子五月足利成氏の臣、金田式部則綱と云う者、当城を築て菖蒲城と号し、爰に住と。

『鎌倉大草紙』に、足利成氏武州府中の軍破れて、

当城に退きし事見ゆ、金田は、本姓佐々木にて、子孫源四郎秀綱、成田下総守氏長に属し、天正十八年没落して、其れより廃城となれり。

後期大蔵氏等の祖は、「十郎行長号龍大夫」と千葉大系図に記載されている（野與党系図では、新大夫）。

「行長」は、千葉三代目武蔵押領使常長の十子で、武蔵国騎西郡に分派した、野與氏の総領常永が、奥州之役に戦死したので、野與党の束ねとして、宗家千葉氏から派遣されて来たのが、この「行長」である。

行長は、騎西郡の何処に入部したのであろうか、関係書の何れにも、その記述は見えないので、其れ等から入居地を確定する事は出来ない。

行長の入居地を推測するには、「号龍大夫」の龍を追う事で、その痕跡を辿る事が出来、其の背景を推測出来るのではないだろうか。

野與氏の発祥の地と云はれる、野牛・篠津の隣接地、そして大蔵氏の拠点である、三箇村大蔵の地との中間に位置する、上大崎村の地に、神倉龍蔵権現社がある。

神倉龍蔵権現社は、村の鎮守なり、祭神祥ならず、十一面観音・愛染明王の二像を本地仏とす。

龍蔵権現「龍」に関係有るものを挙げると、

1、龍は、利生（りゆう）に通じ、騎西町高柳に利生氏が分派している。

2、大蔵氏の内、後期大蔵氏は、行長の実子、行高の拠点菖蒲町場には、青龍権現社がある。

3、大蔵氏からの分派の、西脇氏の拠点と思える地、新掘の観音寺には、十二所権現社がある。

上大崎村

上大崎村は、菖蒲庄と唱ふ、古へは騎西領に属せしと云。当村元は、上・下及荒川新田を合て一村なりしを、慶長年中荒川新田を分ち、元禄以前に上・下二村に分れたり。

小名 上 中 下

神倉龍蔵権現社は、村の鎮守なり、祭神祥ならず、十一面観音・愛染明王の二像を本地仏とす、金剛院持。○八幡社 村民持

金剛院 新義真言宗、戸ヶ崎村吉祥院末、神倉山龍蔵寺し号す。本尊不動を安ず。

普門院 金剛院持、富士山永久寺と号、本尊は、此処も不動也、観音堂

長松寺 禅宗曹洞派、三箇村長龍寺末、慈雲山と号 観音を本尊とせり。地藏堂 ○稻荷社 同寺持

下大崎村

金龍寺 禅宗曹洞派、三箇村長龍寺末、大崎山と号 本尊弥陀を安ず。

明王院 新義真言宗、戸ヶ崎村吉祥院末、白鳳山と号 中興僧良応元禄四年八月五日寂、本尊不動

満蔵寺 羽黒行人派、尾ヶ崎村常楽寺末、本尊大日

白岡町

白岡町は、南埼玉郡の内北部に位置し、面積24、51 Km²、旧利根川の河床跡と柴山沼跡と元荒川の左岸の台地を含む地域の農村地帯であった。

白岡町は、昭和29年に篠津・日勝の2村と大山村の大半が合併して白岡町となり、同30年蓮田市の一部を編入して、現在の町域となる。

近年急速に近代化の道を歩み始めた地域で、今、市制を施行する準備に町を挙げて取り組み、新生に燃えている町である。

町の中央に東北本線が走り、白岡駅・近年新白岡駅が出来て住宅地化が拡大され、新興住宅地と成りつつあり、又町域を貫通して東北新幹線が走り、東北縦幹道路が出来て、交通の要路となり、立地的に重要性が出てきた為、見直されつつある町でもある。

白岡町は、岡泉・実ケ谷・瓜田ケ谷・千駄野・小久喜・上・下野田・篠津・野牛・高岩・寺塚・白岡・柴山・荒井新田・大山等の地域に別れる。

白岡八幡宮 八幡太郎義家が、奥州へ向かう途中、之の神社に戦勝を祈願した、野與党の信仰が厚かった。

町内下野田の旧日光御成街道に一里塚があり、県の史跡に指定されている。

白岡町に、播擲した野與党諸氏は、前期野與党の野與氏は、野與党発祥の地と云はれる、篠津・野牛に、鬼窪・白岡氏は、白岡八幡付近に、又、後期野與党の、南鬼窪氏は小久喜に、佐那賀谷氏は、実ケ谷に夫々居館を構えて居たと思はれる。

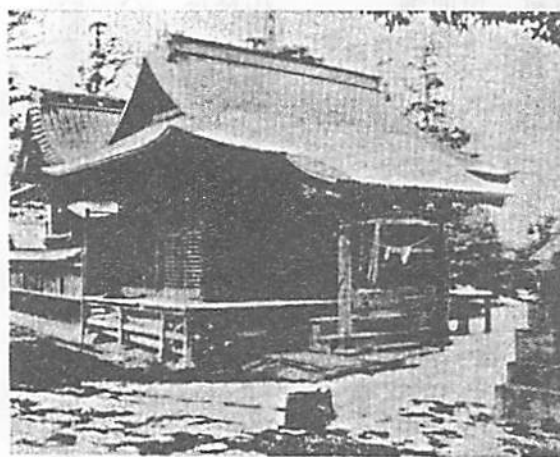
野與氏

白岡町に播擲した、野與氏が「何処に入居したか」となると、判然としないが、今では町内の篠津並びに、野牛の久伊豆神社付近と云う事になっている。

野與胤宗が何故、篠津・野牛に最初の拠点を構えたのだろうかと云う事となると、これ又、白岡町史や埼玉県史を紐解いて見ても、何の手係も無い始末である。

上総介平忠常が武蔵押領使となり、武蔵国に地盤を張り、千葉系図では弟、中村太郎将恒は武蔵国に入部、坂東八平氏の一つとして、秩父・畠山・河肥・江戸・葛西・豊島等の祖となる。

又、平忠常の子上総権介常将は、千葉氏初代を称し、千葉系図では弟、武蔵四郎胤宗は、武蔵国野與に入部して野與氏を称し、騎西郡を支配した。



篠津久伊豆神社

忠常が武蔵押領使として、武蔵国に入部した理由は、平将門の天慶乱の時に、平将門に味方した水川神社系は破れて後退し領地は押領された、其の内、騎西町の南方に、入部したのが武蔵四郎胤宗である。

入部の拠点としては、前支配者「私(シノ)党」の重要な本拠地である、篠津を押えるのが本筋であろう。

1、篠津・野牛の地形は、旧利根川が野牛・篠津を取巻く様に曲流し、篠津は、船着き場として最適地に在った事が、地名より窺える。

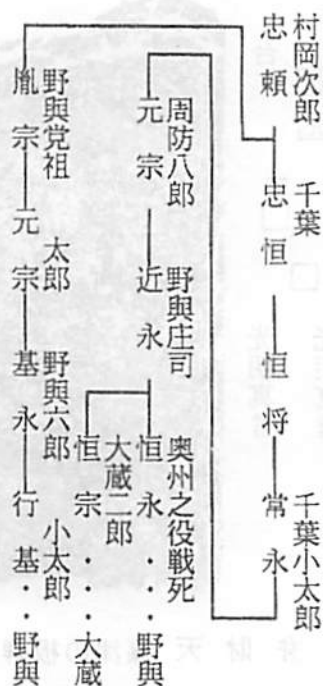
2、私市(キサイ)党又の名を、私(シノ)党と云事から考察して、私(シノ)党は篠の拠点、篠津を押える事が最適の地であったと首肯出来る。

3、私(シノ)党の拠した地で、船着場のある地点と云う意味で、私の津は篠津、と転化したのではなからうか。

野與氏系譜 千葉大系図 (略)



野與氏系譜 野與党系図 (略)



新編武蔵風土記稿 卷之二百一 岩槻領

篠津村

篠津村は、民戸百六十七、東は高岩・寺塚の二村南は、白岡及元荒川を隔てて根金新田、西は下大崎北は、樋口・野牛二村なり、東西十五町余、南北は十四町余、用水は黒川より引けり。

小名 恩出・志べ・横宿・天呑・神山・中妻・やたり・西谷・東谷・沖谷・榎戸・丸部・石道・芦野・中須・天沼・立野・竹花・赤池・餓鬼塚

久伊豆神社 村内の鎮守にて、真福寺の持、雷電社

○弁天社 八幡社 諏訪社 愛宕社 真福寺の持。

愛宕九ヶ所明神合社 九ヶ所の祭神詳ならず。

青雲寺 真義真言宗、戸ヶ崎村吉祥寺末、瑠璃山医

王院と号す、世代の内慶秀明曆三年四月四日寂
他伝へず、本尊不動

薬師堂 薬師像は、丈二尺行基の作、太子堂 門

前にあり、鐘楼 享保中鑄造の鐘を懸ける。
真福寺 青雲寺末、竹林山地蔵院と号す、世代の

賢誉元禄二年正月廿二日寂す、他を伝えず、

本尊大日 おい神社、地藏堂、観音堂同寺持
西光院 青雲寺末、甘露山と号す、僧俊隆元禄十

四年九月十日寂す、他を伝えず、本尊阿弥陀
観音堂 ○富士浅間社 青雲寺持、

普門院 本山派修験、葛飾郡幸手不動院配下、不動

高寿院 当山修験、醍醐三宝院配下、本尊不動。

阿弥陀堂 念仏堂とも云、高岩村忠恩寺持。

篠津地区の板碑

文□

篠津上宿 墓地

破片

篠津 大日一尊

久伊豆神社

破片

日 阿 一尊 光明真言

文□

篠津上宿 墓地

破片

篠津 大日一尊

久伊豆神社

破片

日 阿 一尊 光明真言

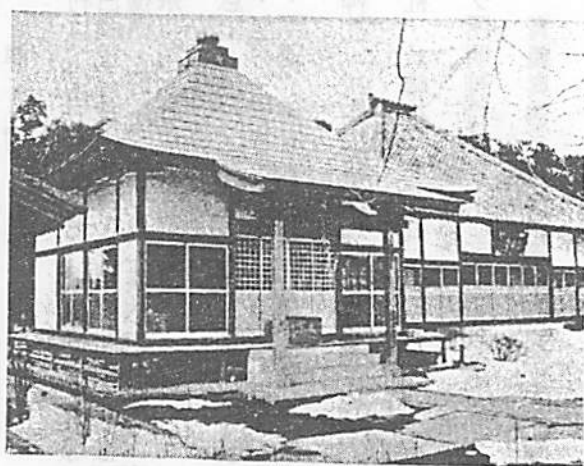
野牛村

白岡町

野牛村は、東は、太田袋・高岩の二村、南は、篠
津・樋口の二村、西は、下早見村、北は、青柳村、



板碑の天財弁



篠津村青雲寺

東西八町・南北三町、用水は、見沼代用水・笠原用水の二流を引来り。

小名 関口・道下・北谷・外舞台・内舞台・北内谷
・馬立・南内谷・野きは・藤井・中しま・寺前
・奥相ノ谷戸・駒形・志部・蓮河原・横しま・中ノ宮・

久伊豆神社 村の鎮守なり、観福寺の持。

末社 天神・稻荷社・駒形社 観福寺の持。

観福寺 新義真言宗、戸ヶ崎村吉祥寺末、大慈山與樂院と号す、第五世良栄寛永十八年八月七日寂他伝へず、本尊十一面観音、座像一尺余、行基の作、又不動を安ず、弘法大師の作、立像丈繞に一寸余。

鐘楼 鐘は元禄十四年の銘あり。

不動堂・阿弥陀堂 観福寺の持。

野牛地区の板碑

野牛地区には、鎌倉期の板碑は発見されていない、古い時代に絶えた為か？

野與庄司近永——恒 永（奥州之役戦死）（一〇八六）
、此の恒永で野與氏は切れている、弟恒宗は大蔵を称している、別の地で供養が成されたもののか？

千百年代には、未だ板石塔婆は無かった筈である。

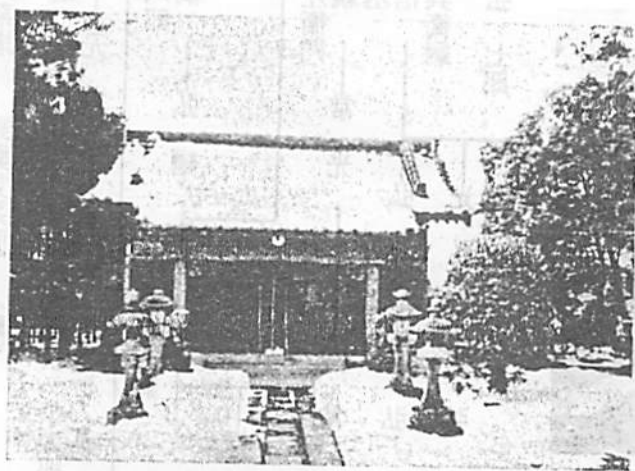
因に、板石塔婆の初見は、江南村の嘉禄三年（一二三二七）で、以後関東では各地で多数造立されている。

野牛久伊豆神社

白岡町大字野牛内舞台652

野牛久伊豆神社の創建は、不詳であるが騎西町の玉敷神社は久伊豆大明神と称し、埼玉郡騎西領四十八ヶ村総鎮守であった。領内である野牛村は、こうした関係で古くから勧請し、村の鎮守として崇拝されたと思はれる、祭神は大己貴命が祀られている。社殿正面に掲げる匾額は、野牛の領主で、江戸時代中期の儒者・政治家としても有名な新井白石が奉納したものである。

又、神社前の掘を「白石掘」「殿様掘」と呼ぶ。
昭和六十年十月 白岡町教育委員会



野牛久伊豆神社

鬼窪氏 (前期野與党)

鬼窪氏は、前期野與党に属す鬼窪氏と、後期野與党に属す南鬼窪氏の二流がある。

註、白岡町史では、前期を北鬼窪と云、後期を南鬼窪と云、區別している。

前期鬼窪氏の拠点は、詳では無いが、興善寺・正福院・白岡八幡宮の附近では無いだろうか。

東側が旧利根川の河道、西側が元荒川が流れて狭まる大地に在り、南に会野谷の地名が残り、「船着き場」とも呼ばれている地で、中世武将の館城に最適な地形が備はった地域である。

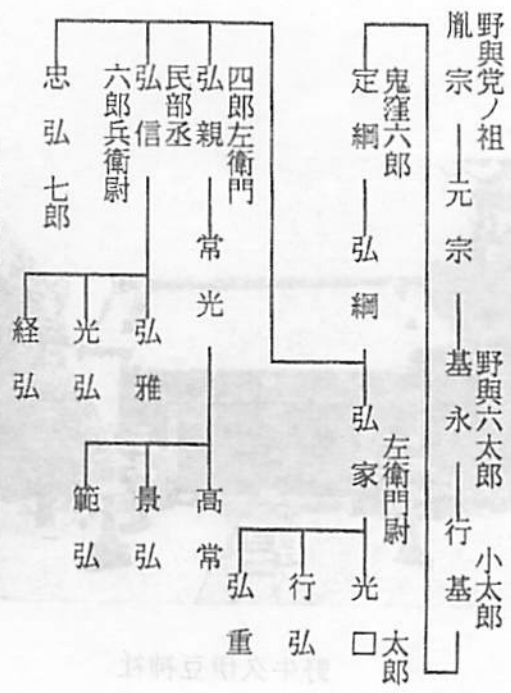
註、白岡町史にある、鬼窪氏の拠点としては、

一つは「元荒川左岸の台地上に位置し、西側より入る谷の北側の地、白岡字新田」を比定している。
 「此の地は、『船着場』と呼ぶばれ、深い掘が在った処、今道路と住宅地となり、痕跡を失う」(鬼窪氏の一つの拠点で河岸跡?)

今一つは「当町篠津の久伊豆神社を中心とする地域である」。(野與氏の拠点)

鬼窪氏の拠点としては、興善寺や正福院や白岡八幡宮の周辺から、板碑の所在が多数確認出来るので、この附近が、前期鬼窪氏の拠点として、推定するのが自然であろう、然し乍、鬼窪氏の分派は、十家に及び、其の各々の拠点を知る事は困難である。

鬼窪氏系譜 野與党系図 (略)



興善寺

白岡村

白岡村は、私市庄と唱ふ。当村郷名は伝へざれど村内八幡社享徳五年の鰐口に、鬼窪八幡とあり。

又高麗郡新掘村聖天院に懸たる、応仁二年の鰐口に、久伊豆社御宝鰐口、願主衛門五郎、武州騎西郡鬼窪郷佐那賀谷村と載す。

此の佐那賀谷は、今も実ヶ谷と書きて近村なり、然れば此の辺給て古は鬼窪郷と言ひしならん、今隣村小久喜に鬼窪姓の人あり、又白岡の名も古き事にして云々。



白岡八幡宮

小名 茶屋耕地・東耕地・山耕地・新田耕地

八幡社 村の鎮守なり、正八幡若宮・八幡姫宮・八幡の三座請せり、社伝に云、当社は建久六年、右大将頼朝の命によりて、鬼窪某奉行して造立し、此の辺にて百余貫の社領を寄付有しが、永享年中当郡新掘の城主、佐々木某社領を没収し篠津・白岡両村の内にて、纒に十二貫文の地を寄附せしが、是も戦争の頃次第に衰へ、何時しか失せりと云。

按に鬼窪氏は、此辺に由緒有る人なれば、当社を草創せしは、さも有らん。

又今も社頭に享徳年中鰐口あれば、かたがた旧社なる事は疑う可ら不、鰐口図の如し、円経九寸七分。



正福院の全景

南 鬼 窪 氏 (後期野與党)

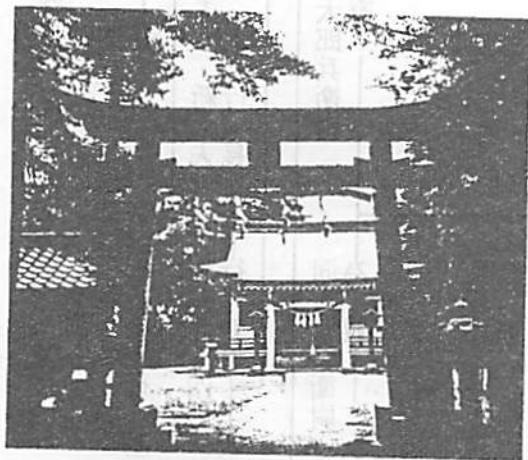
後期の南鬼窪氏の拠点は、小久喜の久伊豆神社から寿楽院付近と思はれる。

南鬼窪氏の、居館跡付近と思はれる地点、小久喜字本田(旧本村)には、鬼久保姓を名乗る旧家が在り、鬼窪八幡宮が祀られ、又、付近を旧鎌倉街道が通じている。野與党の中では、代表的一族で其の活躍も目覚しいものがあり、子孫に良く引継がれている。

南鬼窪氏の事蹟

元暦二年(一一八五)三月十四日、丁酉雨、鬼窪小四郎行親、使節として鎮西に下向す。

御書、参州に遣はさる、「是れ追討に遠慮を廻らすべき事、賢所並に宝物等無為に返入れ奉る可き



小久喜久伊豆神社

事、之を載せ被る」と云々。

元久元年(一二〇四)、阿弥陀寺大壇那、出戸右衛門尉為隆の息為業を発願人とし、南鬼窪小四郎行親・下河辺行平・春日部右兵衛尉実光・他野與・私市熊谷の党、数多の資材を布施して堂坊を再建す。

正嘉二年(一二五八)正月十三日、御所弓場にて弓始めあり、多賀谷、將軍家二所詣で進発の供奉人に、隨兵十二騎の内、鬼窪又太郎・鬼窪左衛門入道(弘家)跡民部太郎(弘重)子の云々。

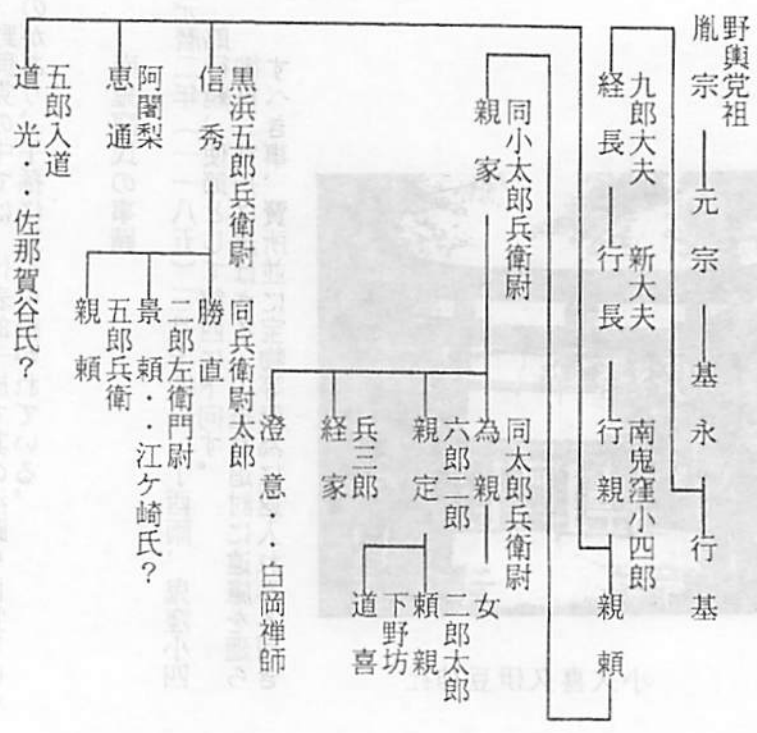
観応三年(一三五二)二月廿日、高麗経澄軍忠状に、人見ヶ原にて合戦の際、渋江左衛門太郎・鬼窪弾正左衛門尉が見える。

同廿八日、高麗ヶ原の合戦に、鬼窪左近将監が見える



小久喜の寿楽院

南鬼窪系譜 千葉大系図 (略)



以上が、後期の南鬼窪氏の系譜で、此の系譜に記載の一族は、南鬼窪氏の本拠地小久喜に隣接の地である。

因に、南鬼窪氏の分派した地域は、南鬼窪II小久喜・白岡II白岡・黒浜II黒浜・佐那賀谷II実ヶ谷・江ヶ崎II江ヶ崎氏が見え、其れ等の地名を冠した名字を見る事が出来、居館跡も其の周辺と思はれる。



鬼久保家屋敷

新編武蔵風土記稿 卷之二百一 岩槻領

小久喜村

小久喜村は、箕勾郷私市庄と唱ふ、当村元は、小久喜と記せしが一旦荒廃し、寛永年中再起して村落をなせし時今の如く改しと云。
此余、村の南に持添新田あり、御料所にて享保十七年糾せり。

小名 本田・三谷耕地

久伊豆神社 村の鎮守なり。○稲荷社・諏訪社村持

寿楽院 禅宗曹洞派、白岡村興善寺末、大高山と号す、本尊釈迦を安ず。

地蔵堂 興善寺持、

旧家者文平 氏を鬼窪と称す、先祖を鬼窪尾張守と呼び、天正十九年正月八日歿し、寿光院秋月斎弧居士と号し。

今の文平迄十代当村に住し、名主役を奉り、彼が家より分れし家五軒在りと云、家系を伝へざれば其の家の事実詳なれず。

されど当国七党の内野與党の譜に、鬼窪六郎定綱と云人を載す、『東鏡』に正嘉二年三月一日の条に、鬼窪又太郎と云人を載せ、又笠原村条に康暦三年の文書にも鬼窪氏見えたり。

文平は、之等の子孫なりや、此の他高麗郡新堀村聖天院に、応仁二年の鰐口に、一久伊豆神社御宝前鰐口、願主衛門五郎、武州騎西郡鬼窪郷佐那賀谷村」と有り、即今南隣村実ヶ谷村之事也、又白岡八幡宮宝に享徳五年鰐口に鬼窪八幡宮と有り、文平が家古き家なる事知るべし。

新宿村

新宿村は、白岡郷に属す、又箕輪庄とも云。

小名 染谷・清野・宿耕地

林性寺 禅宗曹洞派、白岡村興善寺末、東光山と号す、本尊地藏を安ず。

小久喜地区の板碑

寿楽院

上・下欠

三尊

蓮台

鬼久保清家

貞治七年

一三六八

二月十六日

一尊

蓮台

佐那賀谷氏

佐那賀谷氏の拠点としては、佐那賀谷久伊豆神社附近と推測する事が出来る。

佐那賀谷氏は、鬼窪小四郎行親の子に、五郎入道通光が、鬼窪郷実ヶ谷村に分派して、佐那賀谷氏を名乗ったものと思はれるが、史実には南鬼窪の中に含まれ記され区別されていない。

実ヶ谷久伊豆神社には、

実ヶ谷久伊豆神社

南埼玉郡白岡町実ヶ谷553の1

久伊豆神社は、嘉吉元年の創建と伝えられている。

祭神には、大己貴命四柱が祀られている。

当社の古き事を伝えるものに、入間郡日高町聖天院の鰐口がある。鰐口の表には、「久伊豆神社御宝前鰐口願主衛門五郎・武州埼玉郡鬼窪郷佐那賀谷村一、裏には、「大工渋江満五郎・応仁二年戊子十一月九日」の銘がある。この鰐口願主衛門五郎が、当社に奉納したもので、渋江の鋳物師に応仁二年に造らせたものである。

又、銘文に在る、鬼窪郷は当町の、小久喜・実ヶ谷・白岡を中心とした地域が考えられ、此の地の領主鬼窪氏は、武蔵七党の一族と伝えられている。

尚社殿の裏に在る杉の木は、樹齢約五百年高サ十三メートルで町の文化財に指定されている。

昭和六十年十月

白岡教育委員会

実ケ谷村 附持添新田

実ケ谷村は、当村箕勾郷騎西庄に属す。

小名 東・南

久伊豆神社観音の像刻した、円經一尺余の銅鏡ありしが、二十年以前失ひしと云。本地仏なるべし。

正徳四年再建棟札の裏に、当社は嘉吉元年辛酉草創とあれど、社伝は詳ならず、されど高麗郡新掘村聖天院に蔵する鱒口の表に、「久伊豆御宝前云々、武州騎西郡鬼窪郷佐那賀谷村、裏に大工波江満五郎応仁二年十一月九日」とあり。

鬼窪の名今伝へざれど、佐那賀谷・久伊豆神社と言へば、当社の事にして、旧きよりの勧請知るべし。聖天院に蔵す所以は知らず。
末社 稻荷・天王・疱瘡神・秋葉

別当 延命院 新義真言宗、岩槻弥勒寺の末、神光山と号す、本尊十一面観音、近き頃寺伝失えり。

天神社・諏訪社 村民の持。

東光院 当山派修験、勢州世義寺の末、葛飾郡高野村菩薩院の配下、当院は、天文年中起立とのみ伝へり、開祖法印薬王は慶長十四年二月廿八日寂せり。本尊不動を安ず。
俟劔一振蔵す、銘は貞家の文字に似たり、表裏共に梵字四字あり。

第六天社・八幡社

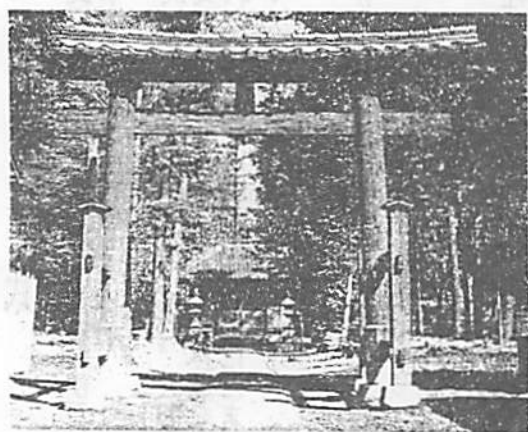
庵 正観音を安ぜり、江ヶ崎村保幅寺の持。
塚 東光院塚共又念仏塚共云。

旧家者太兵衛 野口を氏とす、古隣村江ヶ崎村に住す、後当所に移りしと云、小田原北条氏より与える文書一通蔵せしが廿年前焼失せる由、其の文村人の伝へには、武蔵国川口奉行たるべき者也と有りて、武蔵国騎西郡江ヶ崎村野口彦五郎と記し、虎の印在しものなりと云。

実ケ谷地区の板碑

内田 仁 家
正徳二年 一二月九日 月日

三尊 蓮台
町指定文化財



佐那賀谷久伊豆神社

蓮田市

蓮田市は、昭和四十七年十月市制施行。面積27、28平方キロ、市内に東北本線蓮田駅がある。

元荒川の両側台地上に位置する市。昭和9年、綾瀬村が町制を施行して蓮田町と改称、昭和29年黒浜・平野の二村を合併、昭和47年10月、市制を施行、県下で38番目の市となった。

埼玉ナシ・野菜の産地として知られる純農村であったが、近年は東京迄約40分という交通の便に恵まれ、住宅地として発展、市制施行後、益々人口増大の一途を辿り新興都市化しつつある。

市域には、貝塚の地名が有る程貝塚が多く、綾瀬貝塚は県の史跡に指定されている。貝塚の地名が示す如く、周辺は、小貝塚が多い所である、貝塚神社と其の付近一帯が「綾瀬貝塚」と呼ばれ、縄文時代前期に属する貝塚である。

其の他市内には、関山・黒浜地区等にも、広範囲な分布を見せる貝塚群がある。

古城跡 中世の遺跡として、市内黒浜字江ヶ崎には、江ヶ崎城跡が在る。鎌倉時代に居住した、野興党に所属する鬼窪氏の一族の居館跡と云はれている。

古城跡 市内黒浜 城、今、西城公園と其の付近で、小名に丸城と云はれる地域で、室町時代、城観大夫磯部忠広の居所であった、伝承では、忠広は一寺を創建した、これが城観寺と称すと伝えられている。

お寅石 蓮田市馬込字辻 お寅石と云はれる4m余の板石塔婆が、辻の共同墓地に屹然として立っている。

高さ四米、上幅六十七糎、下幅七十七糎、厚さ十五糎程の大きなもので、「寅御石」と呼ばれる、板石塔婆である。

銘文は、南無阿弥陀仏と蓮台、下部に延慶四年辛亥三月八日敬白と記した、巨大な名号板石塔婆である。

此の板碑は、下部銘文の通り、親鸞門下の常陸の唯願が浄土真宗高田派の祖真仏坊の報恩の為に造立されたものである。

寅御石と云は、南無阿弥陀仏蓮台に延慶四年辛亥三月八日敬白と記した、巨大な名号板石塔婆で、之の石の事を俗に「お虎石」又は、「寅御石」と呼んでいる。

此の石に関する話として、「寅子の伝説」が伝承されている。



蓮田市辻の名号板碑図

白岡氏 (白岡禪師)

白岡氏の居住した拠点は、判然としないが、支配地の範囲から考察して、「城」附近では無いだろうか。

日本城郭全集 埼玉県

丸城

此の地は、四方を水田(深田)で囲まれ、小字名の城(シヨウ)が示す様に、古くは城の在った所と云が、城主、年代とも不明である。

埼玉の館城跡 蓮田町

城 (シヨウ) 南埼玉郡蓮田町黒浜 城

平山城

台地 円系 (現状 西城公園)
室町時代 伝 城主は、城観大夫磯部忠広

伝承

小字に、丸城・向屋敷など城館跡に因んだ地名が残るが、資料は全く残されていない。城観大夫磯部忠広の居処であったが、忠広は一寺を創建した、城観寺と称すが不明。

新編武蔵風土記稿 卷之二百一 岩槻領

城村

城村は、箕輪郷騎西庄に属す、後岩槻城附の村なり

小名 丸城 一に城と云、四方沼田なり、此処は城

在りし処なるべし、何人の居し事を伝へず。此辺に広サ八反程の所水特に深き沼在り。向山屋敷 城に対しての名なるべし。三道島 元荒川村内にて二流となりの村内にて再び合流、中島を三道島と云。山通り

久伊豆神社 城観寺持、当村及新宿村の鎮守なり。末社 稻荷社・第六天社

城観寺 新義真言宗、足立郡倉田村明星院末、東光山と号す、本尊阿弥陀を安す。

阿弥陀堂 同寺持。



城跡西城公園

黒 浜 氏

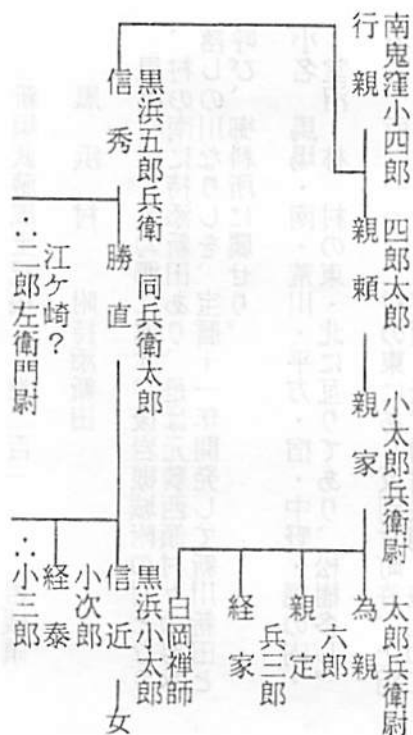
黒浜氏は、「千葉大系図」に其の系譜が記されていて、鬼窪小四郎行親の子、黒浜五郎兵衛信秀が、黒浜に分派して地名を冠する名、黒浜氏を称したものと思はれる。

又、五郎兵衛尉信秀の二子、二郎左衛門尉景頼の名が見え、江ヶ崎に分派して江ヶ崎氏を称している。

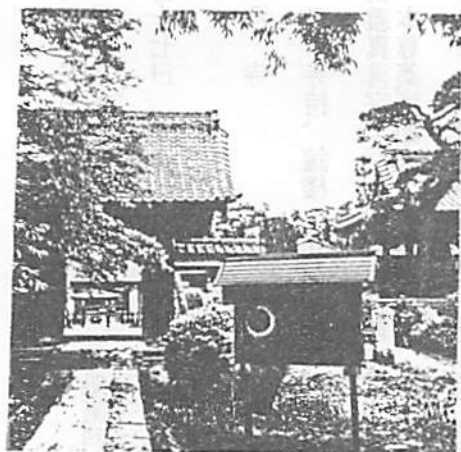
南鬼窪氏は、千葉大系図に依れば、六家に分派しているが、南鬼窪氏は、其の事蹟が吾妻鏡に記載されているが、白岡・黒浜・江ヶ崎・恵通阿闍梨・通光（佐那賀谷）等の事蹟を知る事は困難である。

黒浜・江ヶ崎氏に付いての活躍は、野與党又は、鬼窪の名の元に一割されて特に名が出て来ないが、南鬼窪氏の在る所、黒浜・江ヶ崎氏が在ると考えても良いであろう。

黒 浜 ・ 白 岡 氏 系 譜 千 葉 大 系 図 (略)



黒浜氏は、千葉大系図に依れば、七家に分派し、其の七家の拠点を探る事は困難であるが、其の拠点と思はれる所から、板石塔婆が発見されている。



黒 浜 真 浄 寺 山 門



黒 浜 真 浄 寺 の 板 碑

黒浜村 附持添新田

黒浜村は、箕勾郷に属す、後岩槻城附の村となり、村の南に持添新田あり、是は元騎西領村々の悪水落しの川なりしを、宝曆十一年開発して新川新田と呼び、御料所に属せり。

小名 馬場・南・荒川・平方・宿・中野・掘の内・堂沼 林 村の東・北に亘りてあり、松樹多し。

沼二ヶ所 一つは、村の東にあり反別廿町許、上沼と呼り、一つは、下沼と云、隣村長崎・笹山の二村に係り、反別は五十町許。

久伊豆神社 宝蔵院持。
末社 稲荷社・天神社・神明社共に同寺持。

○神明社・稲荷社 村民持ち。

真浄寺 禅宗曹洞派、上野国邑楽郡当郷村善長寺末法蓮山と号す、永正八年草創にて、開山は本寺の僧章山周文なり、元龜三年九月三日寂す。

開基は、上野国館林城主赤井山城守家堅が弟、赤井田島守家範なり、館林城主赤井氏は、永享の乱に、結城方に與せし舞木駿河守が一族、赤井若狭守が子孫なり。

本尊は釈迦にて、其の腹に釈迦像藏す、此は天文の頃当所の沼より出現せしと伝へり。

太田氏より出せし制札一通藏せり、文左の如し。

一、寺内竹木仮にも不可載取事。
右二ヶ条、違犯之者有之、可有披露、可処蔽科者也仍如件。
戊子九月十七日 田阿弥奉之

真浄寺

弁財天社 真浄寺持、鐘樓 元禄十年の鐘銘文・寮薬師寺 新義真言宗、戸ヶ崎村吉祥院末、東光山と号す、本尊薬師如来。 地蔵堂

観音寺 足立郡丸ヶ崎村多聞院末、施無畏山是源院と号す、十一面観音を本尊とす。

宝蔵院 本山派修験、葛飾郡幸手不動院下、花盛山と号す。開山隆意享禄四年十二月廿七日寂す、此隆意は上総国住真里谷三河守信重が子孫、信濃守景勝と云、後修験となりて当所に住せし由所蔵の系図に見えたり。阿弥陀堂・宝蔵院持。

長崎村は、古へは黒浜村の地なり。何時頃にあや、隣村江ヶ崎の民開墾して一村と為せり、元禄の改に黒浜村の枝郷長崎村とあれば、分村となるは元禄以後の事なり、今も民家は黒浜内に住す。笹山村は、当村は元、黒浜村の内なりしを、元禄の改には黒浜の枝郷にして、別村と成るは其の後事なるべし。

黒浜地区の板碑

真浄寺

黒浜 986

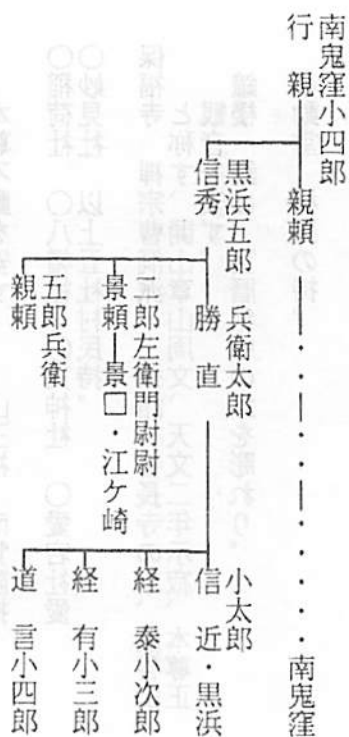
永享十一年一四三九 三月六日 一尊 逆修從口禪門

一、安居中聴聚之衆、喧嘩口論堅法度之事。

江ヶ崎氏

江ヶ崎氏は、蓮田市江ヶ崎地区に、拠点を持つ氏族で野與党の内、南鬼窪よりの分派である。

江ヶ崎氏系譜 千葉大系図 (抄)

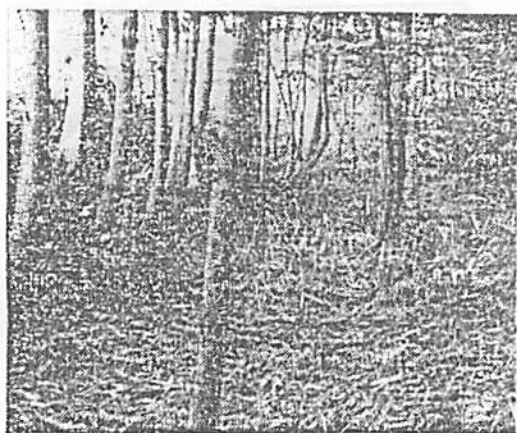


江ヶ崎氏に付いての資料は、「千葉大系図」に其の名が記載されている他に、

1、江ヶ崎久伊豆神社の鰐口銘に「正和三年（一二三二）三月九日、壇那江ヶ崎沙弥行蓮」とある、江ヶ崎氏の法名であろうか。

2、元享三年（一三三三）十一月、記銘の板碑が、江ヶ崎久伊豆神社附近から発見された、「平頼景」と記載されている、南鬼窪行親の孫、二郎左衛門尉景頼が居るが、同人だろうか。

正和三年の鰐口と共に元享三年の板碑も、花井良雄氏方に保存されている。



江ヶ崎城城跡



江ヶ崎久伊豆神社

江ヶ崎村 附持添新田

江ヶ崎村は、箕輪郷騎西庄に属す、村の東に新田あり、日川新田と云、宝曆十一年岡泉村の民半蔵と云へる者開発、則岡泉鹿室及当村の持とす。

小名 掘の内 土居及掘の蹟残り、城蹟なりと云
折戸・西

久伊豆神社 村の鎮守にて、祭神は大己貴命、勧請は嘉鉢吉年中なりと。

別当南覚院 本山派修験、幸手小淵村不動院の配下

九雲山と号す。開山頼奚、永禄六年起立。本尊不動を安ず。 山王社 南覚院持。

○稻荷社 ○八幡社 ○天神社 ○愛宕社愛
○妙見社 以上五社村民持。

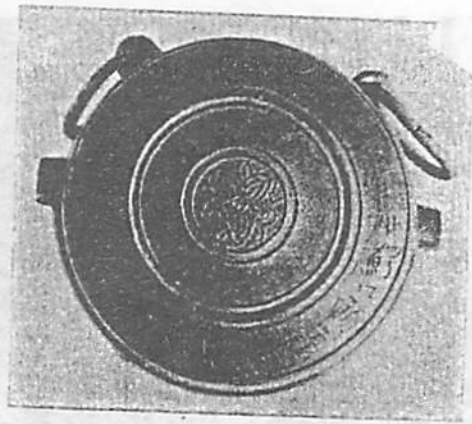
保福寺 禅宗曹洞派、上州館林善長寺の末、洞谷山と称す、開山章山周文、天文二年示寂、本尊正観音を安ず。

鐘楼 鐘は、宝暦年中の銘を彫れり。
不動堂 村民の持。

日本城郭全集 埼玉県

江ヶ崎城 南埼玉郡蓮田市黒浜字江ヶ崎

平城、時代鎌倉期、土塁・空堀残り。



聖天院鑿口
日高町聖天院所蔵

複雑に入り組んだ、幅広い台地の中央部にあり、かなり古い時代の館城である、以前には其の姿を、叶り残して居たが、近年此の地域に住宅団地が出来て、遺構の大部分が破壊されて仕舞った。

此の城は、新編武蔵風土記稿に、「土居及掘の跡残り、城跡なりと伝へり」と記され、北葛飾郡高野村にある永福寺所蔵の「竜燈山伝燈記」には「治安年間(一〇二二〜三九)悪党大太郎が黒浜野に城を構え、同地の績芋長者、江浦大夫一族を殺戮した」と記載して有るが、其の城が江ヶ崎城であるか否やの、歴史は伝わっていない。

又、吾妻鏡に記載の、鎌倉時代の豪族、鬼窪小四郎行親の館城共云れ、又、土地に残る伝承では、新羅三郎義光の子孫と其の一族の居住地と伝わっている。

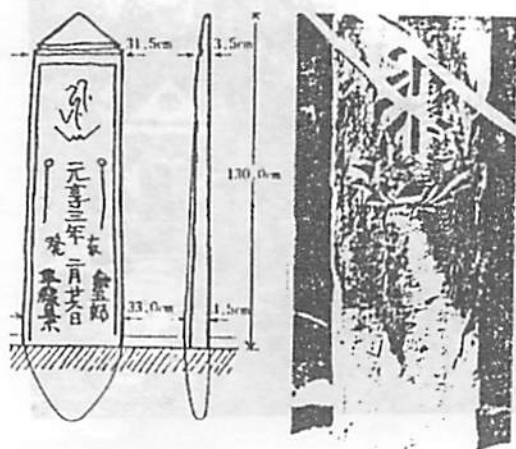
江ヶ崎城跡は、一辺約八十米の正方形に近い本郭が良く残り、高さ約一米（郭内から）の土塁が全面を取巻き、其の外側を幅五米、深さ一米の空堀が巡り、南北二ヶ所に土橋を渡した虎口が見られる。

本郭の回りを外郭が取り巻き、「回」の字形の縄張りが見られる。外郭の一端は百五十米程の長さであった事が確認出来、鎌倉期の城郭と推定出来る。

此の様な、鎌倉期城郭の遺構が比較的良く現存しているが人為的に大規模に破壊された事は残念である。

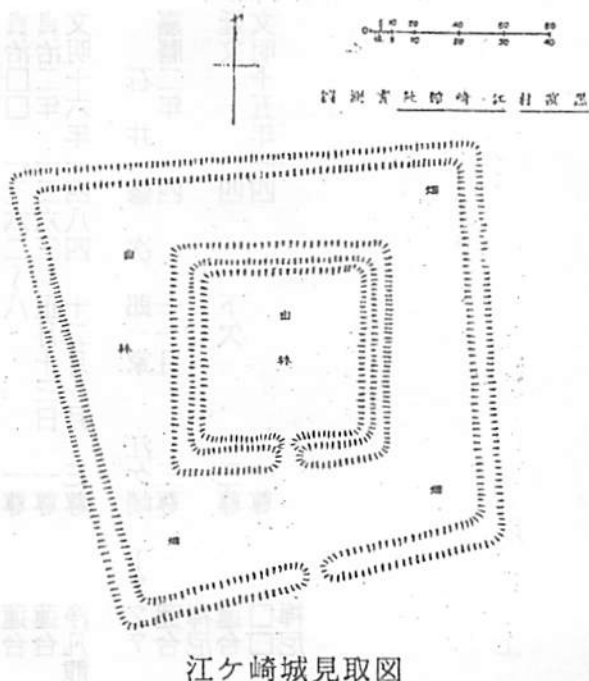
江ヶ崎地区の板碑

元享三年 一三三三 花井良雄 家
 大才 江ヶ崎 295
 光明真言 金五郎
 癸亥 二月廿六日
 光明真言 平頼景



江ヶ崎頼景記銘板碑

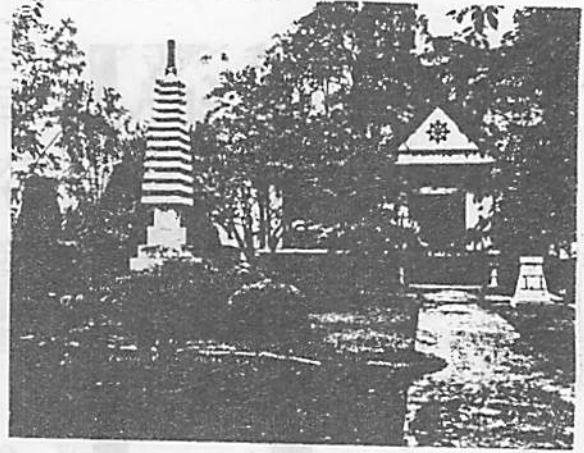
延文五年	一三六〇	十一月	日	一尊	蓮台
永徳四年	一三八二	十月廿八日		光明真言	禪弘
吉岡					
永仁五年	一一二九	九月	日	破片	江ヶ崎
嘉暦四年	一一二九	四月	日	一尊	蓮台
曆応三年	一一四〇	七月	日	一尊	蓮台
曆応五年	一一四二	七月	日	一尊	蓮台
応永二年	一一三五	六月十日	日	破片	蓮台



江ヶ崎城見取図



実ケ谷内田仁家蔵
正応二年銘板碑



江ケ崎・保福寺

延文 文明十五年 一四一四	嘉曆二年 石井修次郎家 一四一四十一月	貞治二年 一三六二八月十三日	貞治三年 一三六二八月十三日	康安三年 一三六二八月十三日	仁安三年 一三六二八月十三日	正長元年 一三六二八月十三日	康安三年 一三六二八月十三日	弘安八年 一三六二八月十三日	建武二年 一三六二八月十三日	保福寺 正月四日	弘安八年 正月四日	永徳四年 一三八四三月廿日	延文二年 一三五七六月廿日	貞永 下欠	寬平五年 破片	石川伊久家 一日	江ケ崎 1155
三尊	三尊	一尊	一尊	一尊	一尊	一尊	一尊	一尊	一尊	江ケ崎 1930	一尊	三尊	一尊				
禪尼印	蓮台印	淨凡龍門	蓮台	蓮台	蓮台	道善禪門	蓮台	妙蓮台	義蓮台	蓮台	蓮台	蓮台	蓮台				

以上

参
考
資
料

吾妻鏡
新編武蔵風土記稿
房総叢書
群書類従
葛蒲町史
白岡市史
蓮田全集
日本武蔵の武士
埼玉の武士
埼玉城

野與党シリーズ 2、
第百五回研究発表

野與党諸氏拠点の考察

葛蒲
白岡編
蓮田

主催 越谷市郷土研究会

発表者 山崎善司

日時 平成四年六月二十八日

発行所 越谷市弥生町の九

山崎企画工房
〒621-3733

表紙

菖蒲・白岡・蓮田 編